

# 文を作る仕組み：統語論 1

[概要] 文は直接には観察できない階層的な構造を持っています。この章では、なぜ文は構造を持つと言えるのか、どのような構造を持っているのか、構造を調べるテストにはどのようなものがあるのか、句構造の一般的な性質としてどのようなことがあるのか、などの点に関して考察します。

[キーワード] 構成素(constituent)、主要部(head)、補部(complement)、付加部(adjunct)、Xバー理論(X-bar Theory)、語彙範疇(lexical category)、機能範疇(functional category)

## 1. 樹形図

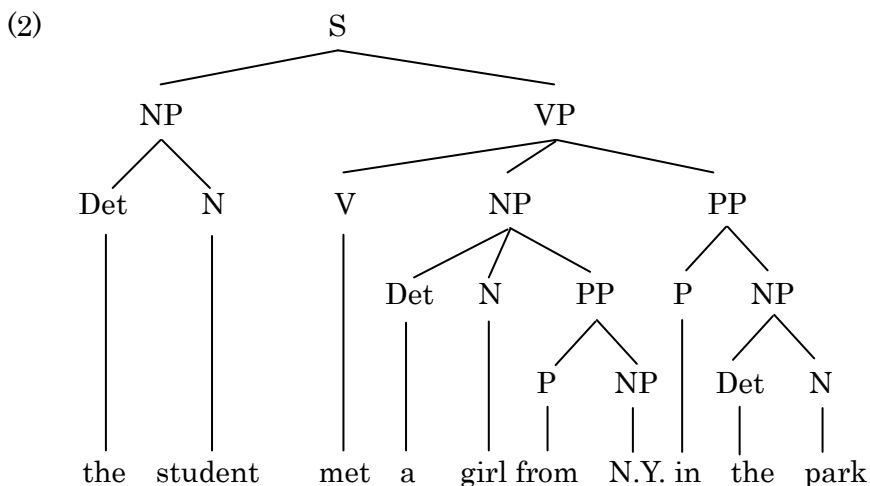
第2章で述べたように、文とは単語が同じ資格で一列に並んでいるだけのものではなく、単語と単語の間にさまざまな関係があり、密接に結びついているもの同士があるまとまりを作っています。言い換えれば、文は直接観察することができない構造を持っているのです。文を作っている単語およびそのまとまりを文の**構成素(constituent)**と言います。

まず、次の文を考えてみましょう。

(1) The student met a girl from New York in the park.

(その学生は公園でニューヨークから来た少女に会った)

この文(sentence; S)は、後で修正を加えますが、概略次のような構造を持っていると考えられます。



(NP=noun phrase, VP=verb phrase, PP=prepositional phrase,  
Det=determiner(限定詞), N=noun, V=verb, P=preposition)

(2)を見てすぐわかるように、(1)の文は the student の部分と met a girl from New York in the park の部分に大きく分けられます。これは学校文法などで、「文は主語と述部に分けられる」と言われることに対応しています。さらに、a girl from New York や in the park などある単語の連鎖がまとまりになっているということが表されています。

この**樹形図**(tree diagram)あるいは**句標識**(phrase marker)には次のような情報が含まれています。

- (3) a. 語と語の間の前後関係(線形順序)
- b. 語の種類(範疇)
- c. 語のまとまり(句)とその種類、およびそれらの間の階層的な関係

まず(3a)ですが、これは樹形図の一番下に単語が左から右に並んでいることからわかります。(3b)はそれぞれの語のすぐ上に線で結ばれている記号により表されています。そして、どの語とどの語が結びついてまとまりを作っているか、それらがどういう種類のまとまりなのか、さらにまとまりの間にどのような関係があるのかが、枝で結ばれた上下の関係と枝が合わさった**節点**(node)に書かれている記号で表されています。たとえば、the と student が合わさって名詞句(NP)という種類のまとまりになっており、同様に、in the park は前置詞句(PP)という**範疇**(category)に属します。そしてそれらの構成素の間にどのような階層的な関係があるのかということが表されています。これらが(3c)の情報です。

ここで注意してほしいのは、樹形図などの句標識で直接的に表されているのは名詞句など範疇の情報であって、主語や目的語といった文中での文法的機能ではないということです。樹形図の中で、ある記号 A から枝を上にとどって別の記号 B にいたるとき、B は A を**支配する**(dominate)と言います。また、A と B との間に他の記号が何もないとき、B は A を**直接支配する**(immediately dominate)と言います。たとえば、文の主語は S に直接支配された NP であると、より基本的な概念に基づいて定義することができるので、句構造でその情報を直接表示する必要はないのです。

## 2. 句構造規則

仮に文法が(3a)と(3b)の情報だけからなる、つまり(4)のような可能な文の式だけからなると考えてみたらどうなるでしょうか。

- (4) a. Det N V Det N P N P Det N
- b. Det Adj N V Adv (Adj=adjective, Adv=adverb)

第2章で文法は文法的な文のリストではありえないということを見ましたが、文法は(4)のような式のリストでもありえません。(4a)は(1)の文を扱うことができ、他の文を作るためにこのような式をどんどん増やしていけばよいように思えます。たとえば、(4b)によって The pretty girl runs fast という文を作り出せます。しかし、可能な文の長さに制限はありませんから、このような式をいくら付け加えていってもこれで十分と

いうことはなく、式のリストは無限に長くなってしまいます。文法とは脳の中に蓄えられている有限の知識ですから、無限の記憶を必要とする(4)のような形ではありえないのです。さらに問題なのは、この式の中に何回も同じ組み合わせのつながりが出てくることです。たとえば、Det N や P Det N という組み合わせが繰り返し現れます。これは偶然ではなく、英語という言語に見られる一般的な性質で、文法はそのことを正しく捉える必要があるのですが、文の式だけからなる文法ではそれができないのです。詳しくは Baker(1978)の第2章を参照してください。

この有意義な組み合わせを捉えようとしたのが**句構造規則**(phrase structure rules)です。英語の句構造規則の一部として次のようなものが考えられます。

- (5) a.  $S \rightarrow NP VP$
- b.  $NP \rightarrow Det (Adj) N$
- c.  $VP \rightarrow V NP PP$

それぞれの規則は矢印の左側に1つの記号があり、右側にも1つ以上の記号があります。これらは左側のものは右側のものから成り立っているというふうに理解されます。かっこはそれで囲まれた要素は無くてもよい、**随意的**(optional)な要素であるということを表します。これらの規則によって、英語における句の成り立ちの規則性、文が主語と述部にあたる名詞句と動詞句から成っていることが捉えられます。そして、たとえば  $VP \rightarrow V \text{ that } S$  という規則があると考えると、この規則と(5)の規則を繰り返し使うことにより、(6)やさらに長い文をいくらでも作り出すことができます。

- (6) John claims that Mary thinks that Bill believes that Bob loves Meg.  
(ボブがメグを愛しているとビルが信じているとメアリーが思っているとジョンは主張する)

このようにして、有限個の規則で無限個の文法的な文を作り出すことができます。一連の文法規則によってある文が出てくれば、その文は文法によって**生成**(generate)されると言います。規則の集合である文法が、英語や日本語などの個別言語に含まれる文法的な文の集合を定義する、すなわち、生成するのです。

### 3. 構成素構造を調べるテスト

(1)の文ははたして本当に(2)のような構造を持っているのでしょうか。直感的に the students や in the park がそれぞれまとまりになっているというようなことは感じられると思いますが、言語を科学的に捉えようとするれば、直接観察することはできない文の構造を客観的な証拠によって確かめてみるのが大切です。

#### 3. 1. 移動

もしある単語の連鎖をその本来の(下線で示された)位置から文中の別の位置に動かすことができれば、その連鎖は構成素であると言えます。移動できるのは構成素だけだからです。

- (7) a. This book, I really like \_\_. (この本が私は本当に好きなんだ)  
 b. A girl from New York, the student met \_\_ in the park.  
 (ニューヨークからきた女の子にその学生は公園で会った)  
 c. \*A girl, the student met \_\_ from New York in the park.
- (8) a. John wants to pass the exam, and [pass the exam] he will \_\_.  
 (ジョンは試験に合格したがっているし、実際合格するだろう)  
 b. \*John wants to pass the exam, and pass he will \_\_ the exam.  
 c. The student said he would meet a girl from New York in the park, and  
 [meet a girl from New York in the park] he really did \_\_.  
 (その学生はニューヨークからきた女の子に公園で会うと言っていたし、  
 本当に彼は会った)
- (9) In the park, the student met a girl from New York.  
 (公園で、その学生はニューヨークから来た女の子に会った)

名詞句など文中の要素を文頭に移動する(7)の操作は**話題化(topicalization)**と呼ばれます。(8)は**動詞句前置(VP Preposing)**で、かっこで示した動詞句が文頭に移動されています。前置されるのは動詞句であって、動詞自体も構成素ではあるのですが、(8b)のように動詞だけを単独で文頭に移動し目的語を元の位置に残すことはできません。(9)で見られるように前置詞句も文頭に移動できる場合があります、**前置詞句前置(PP Preposing)**と呼ばれます。

(1)の文について考えてみると、(7b)は可能ですが、(7c)のようにすることはできません。(2)で表されているように、**a girl from New York** 全体は名詞句という構成素ですが、**a girl** だけではまとまりになっていないのです。(8c)から、かっこで囲まれた部分が動詞句という構成素になっていることがわかります。文中に助動詞がない場合には、時制を担う要素として **do** が現れます。また(9)から、前置できる **in the park** も構成素であることがわかります。これらのことは、今調べた限りにおいて(2)の句標識は(1)の構造を正しく表しているということを示しています。

### 3. 2. 分裂文

英語には**分裂文(cleft sentence)**と呼ばれる構文があり、(10)のような一般形をしています。これは、文中のある要素を **X** の位置に取り立てて**焦点(focus)**として際立たせるもので、文の残りの要素 **Y** と分裂する形になります。

- (10) It is/was X that Y.
- (11) a. It was a girl from New York that the student met in the park.  
 (その学生が公園で会ったのはニューヨークから来た女の子だった)  
 b. It was in the park that the student met a girl from New York.  
 (その学生がニューヨークから来た女の子に会ったのは公園でだった)  
 c. \*It was a girl from New York in the park that the student met.

ここで重要なのは、**X** の位置に現れることができるものは1つの構成素としてまとま

っている要素だけであり、原則として名詞句と前置詞句に限られるということです。これをテストとして使うと、(11a, b)は可能ですが(11c)は不可能であることから、(1)の文の動詞句の内部は(2)のような構成になっていることがわかります。このように、分裂文などある種の文のフレームを構成素構造を調べるために使うことができるのです。

### 3. 3. 代用

ある単語の連鎖が代名詞など適切な**代用形**(proform)で置き換えること、すなわち**代用**(substitution)が可能ならば、それは構成素であると言えます。(1)の文で考えてみると、the student を he に、a girl from New York を her に、in the park を there にそれぞれ 1 語で置き換えることができます。代名詞は必ず名詞句全体に置き換わります。(12)のように a girl の部分だけを her で置き換えることはできません。

(12) \*The student met her from New York in the park.

このことから、この文では a girl だけでは構成素になっていないということがわかります。The student met a girl という文の場合なら、a girl を her に置き換えることができます。このように、同じ語の連鎖でも場合によって構成素になっている場合もあれば、そうでない場合もあるのです。

次に、動詞句に置き換わる代用形である do so をみてみましょう。

(13) A signal which should have turned to red failed to do so.

(赤に変わっているべき信号がそうになっていなかった)

この場合 do so は turn to red の繰り返しを避けるための代用形です。つまり動詞句という構成素全体に置き換わっているのです。

### 3. 4. 節点間の関係

第2章での疑問文を作る規則を正しく述べようと思えば、どうしても主語というまとまりに言及する必要がありました。主語に言及するということは、構造というものを使っていることにほかなりません。さらに、Wh 疑問文を作るには、ある構成素を Wh 疑問詞に置き換え、さらにそれを文頭に移動するという操作が必要になりますから、Wh 疑問文が作れば、その Wh 疑問詞にあたる要素は構成素であると言えます。

**構成素統御**(constituent-command; c 統御)という概念が文法のいろいろなところで使われます。c 統御は次のように定義されます。

- (14) (i) 節点 A と節点 B がお互いを支配せず、かつ  
(ii) A を支配する最初の枝分かれ節点が B を支配しているとき、  
A は B を c 統御する。

これはまさに句構造に基づいて立てられた条件です。構造がなければ支配や枝分かれなどを含むこのような定義はできません。

c 統御が使われる例として、**照応形**(anaphor)の1つである再帰代名詞の現れ方を考えてみましょう。再帰代名詞は単独ではそれが何を指すのかわからないので、必ずその

文の中に指しているものを指定する**先行詞(antecedent)**が必要です。しかし、何でも先行詞になれるわけではなく、先行詞としてふさわしい要素がある条件を満たした位置になければなりません。大雑把に言うと、照応形とその先行詞は(15)の条件を満たさなければならぬのです。

(15) 照応形はしかるべき先行詞によって c 統御されていなければならない。

(16) a. John talked about himself.

(ジョンは自分自身のことについて話した)

b. \*Himself talked about John.

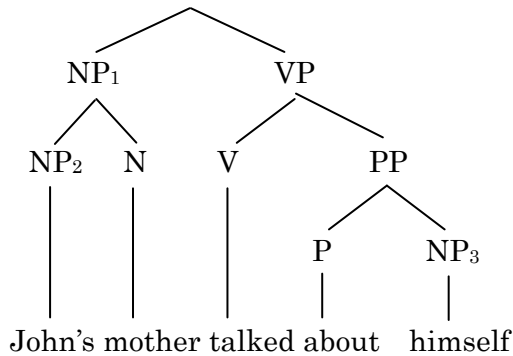
(17) a. \*John's mother talked about himself.

(ジョンの母親は彼自身のことについて話した)

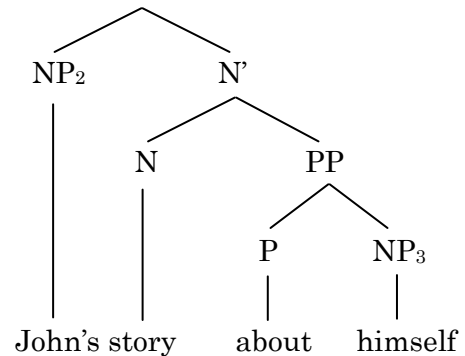
b. I heard John's story about himself.

(私はジョンの彼自身についての話を聞いた)

(18) a. (=17a) S



b. (=17b) NP1



(16a)は下線部 John を himself の先行詞とする読みを持っていますが、(16b)は持っていません。先行詞が左側であればよいのかというと、(17a)がだめなのですから、それだけではないことは明らかです。(17b)は可能ですから、所有格だからだめということでもありません。(17)の2つの文(の一部)を樹形図で示すと(18)のようになります(N'については4節を参照)。(18a)では John(NP<sub>2</sub>)が himself (NP<sub>3</sub>)を c 統御していません。NP<sub>2</sub>を支配する最初の枝分かれ節点は NP<sub>1</sub> ですが、それは NP<sub>3</sub>を支配していないからです。一方、(18b)では NP<sub>1</sub>が NP<sub>3</sub>を支配しており、(15)の条件が満たされて文法的な文になります。同じように(16)の2つの文についても、先行詞が照応形を c 統御しているかどうかという点で違いがあるのです。このような c 統御を使った条件が文法のあちこちで見られ、それによって説明できることがたくさんあるということは、文には構造があるということの証拠にもなるのです。

これまでいろいろなテストを見てきましたが、これらのテストのどれかにパスしないからといって、それが構成素ではないとすぐには言えないということに注意する必要があります。たとえば、動詞句という構成素は分裂文の焦点の位置に現れることはできないなど、個別的な要因によってある特定のテストの結果が非文法的な文になるということもあるからです。

また、移動などの操作を行うことによって多義であった文も1つの意味にしか解釈で

きなくなることがあります。これは、元の構造がその移動が可能であるような構造に決まってしまうからです。

- (19) a. 拓也は汗だくになって逃げる泥棒を追いかけた。  
b. 拓也は[逃げる泥棒を]汗だくになって追いかけた。

(19a)では汗だくなのは拓也とも泥棒ともどちらにも取れますが、(19b)では汗だくなのは拓也としか解釈できません。(19a)には2つの構造が対応しますが、(19b)でのかっこ部分の移動は、それだけで構成素としてまとまっている構造でのみ可能で、修飾語句を残して移動することはできないのです。

構成素を調べるテストの詳細については、McCawley(1998)、特に第3章を参照してください。

#### 4. 句の構造の共通性

2節でふれた句構造規則によって言語の基本的な構造を作ることができますが、句構造規則としてどのようなものでも可能というわけではありません。一般的な性質の1つは、名詞句には名詞が、形容詞句には形容詞が、動詞句には動詞が、必ずその**主要部(head)**として存在しているということです。つまり、ある語彙項目を中心として、その項目が持っている統語的な性質の表れとしていくつかの構成要素が集まり、句を形成しているのです。このように、語彙の特性を反映し、より大きなまとまりに合成されたものということで、句は語彙範疇の**投射(projection)**と言われます。また、このような主要部を持つ構造は**内心構造(endocentric structure)**と呼ばれています。

##### 4. 1. 中間的なまとまり

(2)の樹形図は(1)の構造を正しく表しているかということ、実はまだ足りない部分があります。まず、代用形の1つである *one* を手がかりとして、名詞句の構造について考えてみましょう。

- (20) a. I like this very tall girl more than that one.  
b. These very tall men and very short women don't get on.  
(このとても背の高い男達ととても背の低い女達はうまくやっ  
ていけない)

(20a)は2通りに解釈できます。1つは *one* が *very tall girl* に置き換わっているという解釈で、「私はあのとても背の高い女の子よりこっちのとても背の高い女の子のほうが好きだ」というものです。もう1つは *one* が *girl* だけに置き換わっているという解釈です。ここで問題にしたいのは前者のほうです。代用形は構成素にのみ置き換わると考えると、*very tall girl* でまとまりになっている、この名詞句は *this* と *very tall girl* の2つにまず大きく別れる、ということになります。つまり、N と NP との間に中間的な大きさのまとまりがあるということです。この中間的なまとまりを N' と表すことにします。

(2)の樹形図では a girl from New York という名詞句を3つ股の構造として表していますが、ここにも N'が関係してきます。名詞の後に続く前置詞句には大きく分けると2つの種類があります。

- (21) a. Ben likes the student with long hair better than the one with short hair.  
(ベンはその短い髪の学生より長い髪の学生のほうが好きだ)
- b. \*Ben likes the student of physics better than the one of chemistry.  
(ベンはその化学の学生より物理学の学生のほうが好きだ)

これらの例文に現れる one が置き換われる可能性をみると、同じ前置詞句であっても(a)と(b)では性質が違ってくるのがわかります。(b)での of chemistry などは one の外に出ることができません。つまり、必ず主要部の名詞と一体となって one に置き換わるのです。動詞句についても、同じような区別がみられます。

- (22) a. John will buy the book on Tuesday, and Bill will do so on Thursday.  
(ジョンは火曜日にその本を買うだろうし、ビルは木曜日に買うだろう)
- b. John will buy the book on Tuesday, and Bill will do so as well.  
(ジョンは火曜日にその本を買うだろうし、ビルもそうするだろう)
- c. John will put the book on the table, and Bill will do so as well.  
(ジョンはその本をテーブルの上に置くだろうし、ビルもそうするだろう)

(22a)の on Thursday は do so の外に出ていますが、必ずしも動詞句の外にあるとはいえません。なぜなら、(22b)では on Tuesday という前置詞句が do so の中に含まれており、明らかに動詞句の中にあると言えるからです。そして、(22c)の on the table は do so の外に出ることはできません。このことから、(22a,b)では buy と the book で中核的なまとまりを作っており、その外に on Tuesday がついて、全体として動詞句を形作っていると考えられます。中核的なまとまりを V'と表すことにしましょう。(22c)では put the book on the table で V'になっています。

#### 4. 2. 補部と付加部

他動詞の目的語や(22c)での put の目的語と場所を表す前置詞句は、動詞と強く結びついており、省略することができない要素です。

- (23) \*John put the book. / \*John put on the table. / \*John put.

これらはある語彙項目がその性質として要求する要素なのです。そのような要素をその語彙項目の**補部**(complement)と言います。それに対して、(22a, b)での時を表す前置詞句や、(1)での場所を表す前置詞句は本来的に動詞が要求する要素ではなく、取り去っても文の良し悪しには影響がありません。このような要素を**付加部**(adjunct)と呼んでいます。

意味の面では、(21a)の with long hair は制限的關係節と同じように制限的な修飾語句として働いています。(21b)の of physics は主要部の名詞 student に対してちょうど



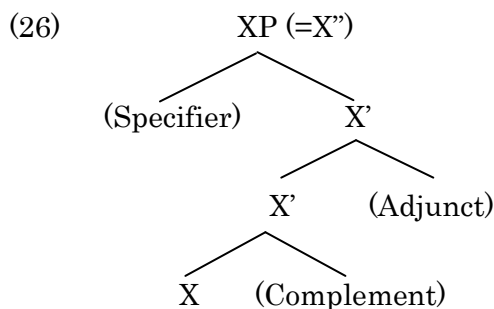
study physics での他動詞の目的語の役割をしています。このような補部と付加部の違いは句の構造の上でも反映されるのです。one や do so のテストで見たように、句の構成はまず主要部とその補部が結びつき、上で見た N' や V' などの中間的なまとまりを形成します。それに付加部が結びついた場合も、同じ種類の中間的なまとまりになります。そのため、特別な場合を除いて補部は付加部より主要部に近い位置に現れます。

(24) \*a student [with long hair] [of physics] (主要部－付加部－補部)

さらに**指定部**(specifier)が結びついて、ある語彙範疇を中心としてその特性を反映した一番大きなまとまりである**最大投射**(maximal projection)を形作ります。指定部はそれに続く内容(主要部+補部)を指定・限定する働きをします。たとえば名詞句では冠詞や指示詞などの限定詞や(17)の所有格(John's)がこれにあたります。

他の語彙範疇についても同じような階層構造が見られ、どの範疇をとっても(26)のような構造をしています。X は範疇をその値としてとる変項で、X が N であれば XP は NP となります。

- (25) a. VP: [(the enemy) [destroy [the city]]]  
 b. NP: [an [analysis [of the sentence]]]  
 c. AP: [very [fond [of coffee]]]  
 d. PP: [quite [in [agreement]]]



語彙範疇に共通してみられる構造の階層性を捉えた原理は、変項の X と階層を表す記号(X' や X'' のプライム、または X や X のバー)を用いて表すため**Xバー理論**(X-bar Theory)と呼ばれます。句構造規則はどのようなものであってもよいわけではなく、次のような X バーの式形に合ったものでなければなりません。付加部は(20)での very tall のように X' の前に現れることもできます。

- (27) a.  $XP \rightarrow (\text{Specifier}) X'$   
 b.  $X' \rightarrow X (\text{Complement})$

ここで英語と日本語の句構造を比較してみましょう。

- (28)
- |    | 英語                               | 日本語            |
|----|----------------------------------|----------------|
| a. | V: <u>study</u> linguistics      | 言語学を <u>学ぶ</u> |
| b. | N: <u>student</u> of linguistics | 言語学の <u>学生</u> |
| c. | A: <u>afraid</u> of dogs         | 犬が <u>怖い</u>   |

句の内部の構成要素とその階層的な関係は英語でも日本語でも同じと考えられますが、主要部と補部の順序は異なります。下線で表したように、英語では主要部が X' の先頭に来ますが、日本語では最後に現れます。原理とパラメータのアプローチ(第3章および第18章を参照)では、この主要部と補部の順序に関する言語間の違いを捉えるものとして、X バー理論に**主要部パラメータ**(head parameter)が含まれると考えます。このパラメータには選択肢として2つの値があり、英語では主要部先頭(head-initial)、日本語では主要部終端(head-final)という値が選択されます。英語が話されている環境で子どもが言語を習得する際には、たとえばある動詞とその目的語の順序について大人の発話などから動詞が先だとわかれば、他のすべての動詞について、さらには他のどの範疇についても、主要部が先頭に来るとわかってしまうということになります。それぞれの範疇について別々のデータから主要部が先頭か後ろかを決める必要はないのです。つまり、1つのことについてわかれば、他のことについてはデータにいちいち接しなくてもわかってしまう、見る前から知っているということが可能となるわけです。これがプラトンの問題を解決する統語論での1つの例となります。なお、指定部と X' の間の順序は別のパラメータによって定められます。

#### 4. 3. 語彙範疇と機能範疇

これまで見てきた句標識には**語彙範疇**(lexical category)とその投射しか現れていませんでしたが、それとは別に**機能範疇**(functional category)と呼ばれるものがあり、文を構成する上で重要な役割を果たしています。たとえば(2)の S や、次の that, for, if などによって導かれた従属節(より大きな文の一部として埋め込まれた文)はどのような範疇でしょうか。

- (29) a. I expected [*that* [she will dance after lunch]].  
 b. [*For* [her to dance after lunch]] would be surprising.  
 (彼女が昼食後にダンスをしたら驚きだね)  
 d. I wonder [*if* [she will really get here]].  
 (彼女は本当にここに来るのかしら)

(2)では S は主要部を持たない**外心構造**(exocentric structure)として捉えられていますが、そのような従来の分析とは異なり、S も内心構造を持つという分析が提案されてきています。語彙範疇と同じように文にも主要部があるとすれば、それは何でしょうか。文全体の種類や性質を決めている部分が主要部であると考えれば、ある文が時制文であるかないか、時制を持たない非定形文であればその種類はなにかというようなことを決定している要素、ということになるでしょう。

- (30) a. They expected [John *would* win the race].  
 b. They expected [John *to* win the race].  
 (彼らはジョンがそのレースに勝つだろうと思っていた)

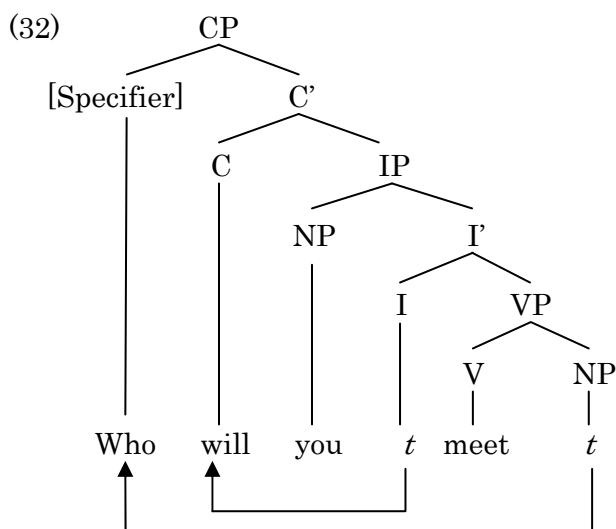
(30)を見ると助動詞の *would* と *to* は節の中で同じ位置を占めていることがわかります。さらに、助動詞も *to* もその後ろに不定形の動詞を要求します。そこで、これらは同じ範疇に属するものと考え、それを**屈折(inflection)**と呼び、**INFL**あるいは**I**と表します。**INFL**は補部として動詞句をとり**I**を形成します。そして**S**は、主語の名詞句を指定部としてとった**I**の最大投射**IP**と考えます。

(29)において、埋め込まれた文が全体として平叙文であるのか、疑問文であるのかというようなことを決めているのが斜体部です。これらは**補文標識(complementizer)**と呼ばれ、**that**は定形の平叙従属節を、**if**は定形の疑問従属節を、**for**は不定形の従属節を導きます。これらの現れる位置を**C(OMP)**と表します。**C**はその補部として**IP**をとって**C'**となり、さらに指定部と合わさって最大投射の**CP**になります。

**INFL**や**COMP**という機能範疇も語彙範疇と同じように**X**バー理論に従った句の構造を持つと考えているわけですが、そのように考える理由として次の文を見てみましょう。

- (31) a. \*I wonder {if will / will if} the teacher invite the student.  
 b. *Who* will you meet this afternoon? (あなたは午後誰に会うのですか)  
 c. I wonder *who* she met yesterday. (彼女は昨日誰に会ったのかしら)

助動詞は**IP**の主要部である**INFL**の位置にあります。このことは、(8)や(22)で見たように、助動詞は動詞句といっしょに移動したり代用形に置き換わったりしないことからもうなずけます。疑問文を作る規則によって助動詞は主語の前に移動しますが、構造の上ではどの位置に動くのでしょうか。主要部は別の主要部の位置にのみ移動できると仮定すると、助動詞の移動先も主要部でなければなりません。それが**C**の位置であり、1つの主要部を2つの要素が同時に占めることはないと考え、補文標識と前置された助動詞は両方同時には起こらないと予測されます。そして、(31a)で示されているように、事実はそのとおりです。さらに、(31b, c)のような**Wh**疑問文や埋め込まれた疑問文で**Wh**句が移動する先は、**CP**の指定部の位置であると考えられます。今述べたことを図示すると、次のように表すことができます(*t*は要素が移動した後に残る**痕跡(trace)**、第9章を参照)。



日本語では主要部が補部の後ろに来ますが、CやIの場合も例外ではありません。日本語では疑問文の最後に「か」という助詞を付けますが、これはCの表れですし、「だった」など時制を担う要素も文の最後に現れます。

この節の内容に関しては、Radford(1988)や Radford et al.(1999)が参考になるでしょう。

## 基本問題

1. 次の文の構造を樹形図で示してみましょう。

- (1) Bill has an extremely brilliant assistant.
- (2) The students moved the desks into the hall.
- (3) The fact that quick results are unlikely is no excuse for delay.

2. 本文の(26)の文を生成するにはどのような句構造規則が必要でしょうか。Xは使わないでそれぞれの範疇について規則を書いてみましょう。

## 発展問題

1. 次の文は2通りに解釈できます。

- (i) A review of the new book by three authors will soon appear.

A. それぞれの解釈に対応する主語の名詞句の構造を書いてみましょう。

B. (i)の文から(ii)のような形にすることができます。

- (ii) A review will soon appear of the new book by three authors.

この文はどのような解釈を持つでしょうか。(i)が持っている解釈の可能性と異なるなら、それはなぜでしょうか。

2. 等位接続(coordination)も構成素を調べるテストとして使われることがあります。andやbutは、原則として同じ種類の構成素同士を結びつけます。

- (i) a. The teacher and the student discussed the problem.  
b. John washed his shirts and polished his shoes.

それでは、次のそれぞれの文は本文の内容と考え合わせたとき、どのように取り扱うべきでしょうか。

- (ii) a. John washed, and Bill ironed, the shirts.  
b. John ate a fish, and Bill a steak.  
c. John sent a letter to Mary and a book to Sue.

## 読書案内

McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2<sup>nd</sup> ed., The University of Chicago Press, Chicago.

構成素構造についての詳しい記述のほか、英語のさまざまな統語現象について独自の分析を展開しています。

Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure*, The MIT Press, Cambridge, Mass.

Xバー理論の重要な研究書。句が4層の構造を持つとする仮説のもと、英語の各種の構文について具体的に検討しています。

Emonds, Joseph E. (1985) *A Unified Theory of Syntactic Categories*, Foris, Dordrecht.

Chomsky(1981)で展開された統率と束縛の理論の枠組みによる統語範疇とXバー理論の考察。句の種類によって階層の数が異なると主張し、独自のXバー理論により文構造を提示しています。

## 引用文献

Baker, Carl L. (1978) *Introduction to Generative-Transformational Syntax*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English*, 2<sup>nd</sup> ed., The University of Chicago Press, Chicago.

Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge University Press, Cambridge.

Radford, Andrew, Martin Atkinson, David Britain, Harald Clahsen, and Andrew Spencer (1999) *Linguistics: An Introduction*, Cambridge University Press, Cambridge.